

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520647

研究課題名(和文) 日本語教育におけるピア・ラーニングの授業デザインと教師研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Classroom design of Peer Learning and teacher training program in Japanese Language Education

研究代表者

館岡 洋子 (Tateoka, Yoko)

早稲田大学・日本語教育研究科・教授

研究者番号：10338759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：ピア・ラーニングという動的な授業を実施できる教員養成はどのように可能かを模索し、その具体的な方向性を探った。リソースとその事例を収集し、授業分析をした。また、協働実践研究会(<http://kyodo-jissen-kenkyukai.com/>)を開催した。2013年11月23日第6回研究会では、アジア各国(中国、韓国、台湾、モンゴル、インドネシア、タイ)から実践者を招聘し議論した。国内外において先述のリソースを利用して、研修を実施した。一方、より広く研修をすることは逆に、10名の固定メンバーで「実践持ち寄り勉強会」を立ち上げ、データを持ち寄り学び合う学習コミュニティを設定した。

研究成果の概要(英文)：The project focused on the possibilities of formation and development for teachers capable of teaching dynamic peer learning classes. Thus, 1) we collected resources and data about case studies, and 2) analyzed the interaction in the classrooms. 3) We held several events of the Society for Research on Collaboration in Language Learning. At the 6th symposium, held on 23 November 2013, we invited for a debate practitioners of peer learning from Asian countries (China, Korea, Taiwan, Mongolia, Indonesia, Thailand). 4) By using the resources mentioned above, we organized training sessions both domestically and abroad. On the other hand, 5) in contrast to the idea of having training sessions open for as many people as possible, we also established a learning community of 10 fixed members who share and discuss data about their respective practices within a study group.

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：ピア・ラーニング 教師研修 授業デザイン 日本語教育 リソース コミュニティ 協働 養成

1. 研究開始当初の背景

異なった背景をもつ多様な人々が共存するためには、円滑な人間関係を築いたり、問題の解決を行ったりすることができるようなコミュニケーションの力が求められている。このような力を育成するために、ピア(教室内の学習者)同士が助け合って学ぶ「ピア・ラーニング」は大きな可能性をもっている。しかし、「教師主導」の授業が、基本的に教師から出発した教室活動が行われるのに対し、「ピア・ラーニング」の授業は学習者同士(ピア)のやりとりを中心とし、可変的かつ動的でその場で学習者の動きに合わせて即興的に実践を変容させていかなければならない。そのため、教師たちにとっては、実施上、以下のような難しさがある。

課題 どう実施したらいいかわからない

学習観・教育観(教師から日本語を教えてもらうのだという考え方)の違い、教室活動や教授プロセスが可視化されていないこと、それと関連して教材や指導書がないこと、などがあげられる。

課題 活発な授業活動となるが、活動が目的化してしまう 一過性の活発さであって、思考やコミュニケーションの深まりが期待できない場合も多く、本来の目的を見失いピア活動自体が目的化してしまう。

2. 研究の目的

課題を解決するためには、ピア・ラーニングを「どのように」進めるのか、課題を解決するためには、「なぜ」「何を」「誰に」行うのかを明らかにしなければならない。したがって、方法論および活動目的とそれを支える教育観の明確化が必要となる。教師が自律的にピア・ラーニング実践ができるためには、固定的な教材ややり方の知識を与えるのではなく、教師自身の気づきを促し、成長できるようなツール(授業デザイン)と場(研修)が必要であると考えます。

本研究では、多様なフィールドにおけるピ

ア・ラーニングの実践の繰り返しの中から「理論(原則)」を立ち上げ、それに基づき研修プログラムを開発し、教師自身が自律的にピア・ラーニングを実践することができるようになることを目的とする。

3. 研究の方法

上記の目的を果たすために以下の流れで教師研修プログラムを開発する。

【ステップ1】今までの実践の記述+先行研究による理論研究

【ステップ2】ピア・ラーニングのための教材リソース集作成と授業デザイン作成

【ステップ3】上記教材を使用して、ピア・ラーニング授業を実践し、録画

【ステップ4】授業分析+ピア・ラーニングのための「理論(原則)」の立ち上げ

【ステップ5】1~4のステップをふまえて教師研修プログラムを開発

4. 研究成果

ピア・ラーニングという動的な授業を実施できる教員養成はどのように可能かを模索し、その具体的な方向性を探った。

(1)ピア・ラーニングのための教材リソース集および授業デザイン集を作成した。

申請者らが行っているピア・ラーニング実践から、各自が読む・書く・話す・聞く活動のための素材提供を行い、それとともに授業デザインを記述した。また、ピア・ラーニングとは何かを理論的に再検討した。

(2)作成した教材および授業デザインに基づき授業実践を行い、当該授業の分析を行った。

作成した教材および授業デザインに基づき、ピア・ラーニングを実施した。授業分析からピア・ラーニングにおける「理論(原則)」について検討した。

(3)実践から立ちあがった理論(原則)をもとに、研修プログラムを開発し、国内外で

教師研修を実施した。

上記の(1)~(3)は順にというよりは往還的に行った。たとえば、海外での教師研修によりどんなリソースが不足しているか、どんなニーズがあるかが明らかになり、(1)のステップのリソース収集に反映させるなどである。また、実践のあり方も国や地域の教育体制や教育文化によって異なる面があり、研修をしながらプログラムの修正をしていった。

また、学会での講演や発表、ワークショップも行った。

(4)協働実践研究会を開催した。

(<http://kyodo-jissen-kenkyukai.com/>)

申請者らが中心になって設立、運営をしている協働実践研究会の第6回は、2013年11月23日にアジア各国(中国、韓国、台湾、モンゴル、インドネシア、タイ)からピア・ラーニング実践者を招聘し議論した。このことにより、ピア・ラーニング実践者たちのネットワークの第一歩を踏み出すことができた。

(5)より広く研修をすることとは逆に、10名の固定メンバーで「実践持ち寄り勉強会」を立ち上げ、データを持ち寄り学び合う学習コミュニティを設定した。この勉強会では、具体的な課題について、問題意識を共有する者たちがじっくりと議論する場をつくることができた。今後の教師の協働の場としての意義があると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

舘岡洋子(2012)「テキストを媒介とした学習コミュニティの生成 二重の対話の場としての教室」『早稲田日本語教育実践研究』1, 57-70.

<http://hdl.handle.net/2065/34125>

舘岡洋子(2011)「協働による学びがはぐくむことばの力 「教室で読む」ということをめぐって」『早稲田日本語教育学』9, 41-49. <http://hdl.handle.net/2065/31743>

[学会発表](計41件)

Tateoka, Y/ Kondoh, (2014, March 21-22) A: Collaborative learning for reading comprehension and beyond JLTAV Statewide Conference @Hemisphere Conference Centre, Australia

池田玲子(2013年12月7日)「日本語教育のピア・ラーニング- 創造的学びの理論と授業デザインの実際 -」韓国日語教育学会国際学術大会

舘岡洋子(2013年11月30日)「他者理解・自己理解につなげるピア・ラーニング 自分の問題として考える」『日本語教育学会平成25年度第9回研究集会(四国・中国地方)』@愛媛大学

舘岡洋子(2013年11月16日)「協働の学びの場をデザインする」国際交流基金バンコク日本文化センター2013年度第1回日本語教育セミナー@国際交流基金バンコク日本文化センター

池田玲子、舘岡洋子(2013年9月8日)「なぜ協働するのか グローバル化の中での日本語教育のあり方」国際交流基金北京日本文化センター日本語教育学シリーズ講座2013第3回講座(国際交流基金北京日本文化センター)

岩田夏穂・初鹿野阿れ(2013年9月7日)「会話分析の知見を生かした会話教材の開発-『にほんご会話上手!』の作成から-」社会言語科学会第32回大会ワークショップ「日本語教育に生かす会話分析の可能性 日常的なやりとりに注目して」於:信州大学

Tateoka, Y. (2013, April 27-28). Designing Processes for Collaborative Learning: Collaborative Reading in the Classroom.” Tokai University European Center (TUEC)

Japanese Language Education Workshop
(Denmark, Vedbæk: TUEC).

池田玲子(2013年4月19日)「日本語教育のピア・ラーニング(協働学習)-理論と授業デザイン」フランス日本語教師会 於: レンヌ大学

舘岡洋子(2012年12月16日)愛媛大学国際連携推進機構「ピア・ラーニングにおける教師の学習環境デザインとは」(愛媛大学)

舘岡洋子(2012年12月1日)九州日本語教育連絡協議会講演会「協働の学びの場を創る テキストを協働で読む」(福岡大学 七隈キャンパス)

舘岡洋子(2012年11月25日)日本教育心理学会第5回総会「ピア・ラーニングのための教員養成プログラムの開発」(琉球大学)

舘岡洋子・ロマン・パシュカ・崔ヒョンピル・鈴木寿子(2012年8月19日)「日本語教師の成長を支えるものは何か 個体主義を越えて」日本語教育国際研究大会 パネルセッション 名古屋大学

舘岡洋子(2012年3月4日)「ひとりで読むことからピア・リーディングへ 協働の学びをデザインする」国際交流基金クアラルンプール日本文化センター2011年度マレーシア日本語教育セミナー「読解教育について考える」(Ambang Asuhan Jepun, Pusat Asasi Sains, Universiti Malaya)

舘岡洋子・近藤彩・金孝卿(2011年8月20日)「協働型授業を実施するための教員養成/教師研修のあり方を考える」世界日本語教育研究大会(天津外国語大学)

池田玲子・朱桂榮・羅曉勤・倉持香・岩田夏穂(2011年8月20日)「東アジアの日本語教育協働学習の実践研究のためのネットワーク構築」世界日本語教育研究大会(天津外国語大学)

〔図書〕(計8件)

舘岡洋子(2013)「授業をつくる 『学びの場づくり』における教師と学習者」加藤好崇他 編著『日本語・日本教育の研究 その今、その歴史』スリーエーネットワーク pp.28-41.

舘岡洋子(2013)「日本語教育におけるピア・ラーニング」中谷素之・伊藤崇達『学び合いの心理学』金子書房 pp.187-203

近藤彩・金孝卿・ムグダヤルディー・福永由佳・池田玲子(2013)『ビジネス・コミュニケーションのためのケース学習 職場のダイバーシティで学びあう』教材編 ココ出版

大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂・池田玲子(2012)『ピアで学ぶ大学留学生の日本語コミュニケーション プレゼンテーションとライティング』ひつじ書房

〔産業財産権〕なし

〔その他〕
ホームページ等
舘岡洋子研究室
<http://www.gsjal.jp/tateoka/>

協働実践研究会
<http://kyodo-jissen-kenkyukai.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者
舘岡 洋子(TATEOKA, Yoko)
早稲田大学・大学院日本語教育研究科・教授
研究者番号: 10338759

(2)研究分担者
池田 玲子(IKEDA, Reiko)
東京海洋大学・海洋科学技術研究科・教授
研究者番号: 70313393

(3)研究分担者
岩田 夏穂(IWATA, Natsuho)
大月短期大学・経済科・准教授
研究者番号: 70536656